

東奥日報

2021年(令和3年)6月11日(金曜日) (18)

ハ **戸** 八戸工業大学は7日、八戸市立市民病院と地元企業2社との医工連携で開発した救急ストレッチャーに対応した陰圧ボックスを、同病院に寄贈した。ウイルスを含む飛

沫がボックス外に流出するのを防ぐ構造で、感染疑いのある患者をストレッチャーで移動させたり、PCR検査の検体を採取したりする際、横たわった患者の上半身にかぶせて使用する。(千葉真由美)

コロナ疑い患者すぐ隔離

ストレッチャー対応陰圧ボックス

八工大など市民病院に寄贈



今院長(左から2人目)らに陰圧ボックスの使い方を説明する浅川准教授⑥

同大が取り組む地域貢献の一環。「どこでも陰圧室」と名付けられたボックスは、約50センチで、医療用フィルタ1付き排気装置を稼働させ

ると、ボックス内が陰圧化する仕組み。ボックス内に手を入れて検体採取や処置ができるように、使い捨て手袋が取り付けられる穴が4カ所ある。

同病院での贈呈式には、大学と病院関係者、ボックスを製造した大和エンジニアリング(同市)の馬場幸男代表取締役、医工連携をコーディネートしたザックス(本社東通村)の田高昭人八戸営業所長が出席した。開発に携わった同大機械工学科の浅川拓克准教授は「最前線でコロナと闘う医療従事者の感染防止に役立ってほしい」と語った。同病院の今明秀院長は「救急搬送された患者の感染が疑われる場合、装置(ボックス)を使うとすぐに隔離でき、院内で感染が伝播するのを防げる。非常に使いやすそう」と感謝した。

※「この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです」